

## 古語辞典としての『字訓』と原日本語の探求

工藤進

ドイツの外交官言語学者フンボルト(1767-1835)以来、意味を表す語と文法機能しか表さない語との並列的連結から成る膠着語としての日本語と、人称、数、格、態といった基準で各語が構造的に対応し合う、屈折・照応言語としての印欧語とはまったく系統の違う言語と考えられてきた。しかし、こうした言語類型論を支える文法形式は言語を分け隔てる決定的根拠ではないという主張<sup>1</sup>もある。また現代人の遺伝子の共通性は、現代のヒトの間に越えられない言語の障壁が生まれる理由のないことも示している。現代のわれわれは世界の言語の多様性に驚嘆すると同時に、その相似の濃さ深さに感動する。現在の印欧祖語研究は、印欧語と日本語の溝がいままで考えられていたほど大きなものではないことを示しつつある。日本語の起源の追究範囲から印欧語を排除してしまう理由はない。

表記法としての漢字のはじまりは、音体系としての中国語成立以前から存していると思えるほど古い。おとらず古いエジプトのヒエログリフ(19世紀解読)やヒッタイト文字(20世紀解読)も、究極的には概念表象と助辞とからなり、東西の方法論的距離は遠くない。

東西でこうして始まった表記法は西欧では、ミュケーナイ時代(紀元前16-12世紀)、ギリシャ語を表した線文字Bのように、仮名文字の体系に似た音節表記文字に簡略化された。これが消えた後は、次第にギリシャ語のような、現代のアルファベットに近い音韻表記に変わる。このように音としての体系を前提とするようになった西欧の表記法と、日本語の漢字と仮名による体系とは、依然として大きく異なっただけである。表意文字としての漢字は、意味の側面から日本語を豊かにしたが、正にその「意味を持つ」特徴によって、漢字による表記以前の日本語の真実を捉えにくくしている。

「モノ」とは何か？

<sup>1</sup> アメリカのグリーンバーグ、ロシアのドルゴポルスキーなど

フランスで数年前、宮崎駿の『もののけ姫』が *Princesse Monono-ké* と題されて上映され評判になっていた。「もののけ」は「モノの化」であることは明らかだが、このモノとはなんだろうか。

『日本書紀』巻第二（神代下）、高皇産靈尊が「吾、葦原中国の邪あしき鬼ものを撥はらひ平むけしめむと欲おもふ」（岩波文庫）とのたまう箇所がある。ここで用いられている「鬼もの」についての、編者の注は次の通りである。「モノの原義は、存在することが感じられるということ。手で把えられるのもあり、手に確かには把えられないものもあった。後者がつまり、鬼にあたる」。

日本語モノには触知可能なものと、触知できないものがあり、前者は漢字では周知の通り、物、者として表されるのがふつうだが、「触知できないもの」には鬼の字をあてることがあった。

白川静の古語辞典としての『字訓』には、日本語モノの語義が次のように説明されている。「鬼をもいう。〈もののけ〉、〈もの狂ひ〉の〈もの〉であり、〈物知ものしり〉も〈鬼知ものしり〉の意で、靈異のことに通ずる人をいう。（…）国語の〈もの〉は、その実体の把握しがたい語であるが、これにあてられる物・者・鬼によって、その語義の領域を考えることができる。」白川静は日本語モノの語義領域を、意味の対応する漢語から明らかにしているのである。

ここでは日本語のモノ *mono* という音が言語的にどのような脈絡を通じて生じたのか、ということとはわからない。言い換えると、この説明はモノを表すとされる文字、物（ぶつ）、者（しゃ）、鬼（き）によってモノの語義領域を示しているが、「モノ」という音の連続そのものを説明しているのではない。日本語モノの元に漢語があったのではないので、モノの源を漢語にさぐることはできないのだ。

一方、実際、漢語が元にあった日本語はたくさんある。漢語をそのまま用いた「餓鬼」、「布施」といった語の他、「梅」、「馬」といった昔からの日本語風の語の実体は中国からの移入である。梅（ウメ）の元には中国語、梅（呉音メ・マイ、漢音バイ）、馬（ウマ）には馬（呉音メ、漢音バ、唐音マ）があったと言われる。上代から用いられている魚（イオ、ウオ）も、元にあったのは漢字の魚（呉音ゴ、

漢音ギョ)と同じものであった可能性が強い。現在、若い人にもっとも好んで用いられている表現「可愛い」も、中国語にはすでに「可愛(クーアイ)」がある。こうしたふつうの日本語、それも極めて日常的な語が中国語に関わっていることは驚くべきことだ。しかし漢字導入前の日本語に漢字表記が施された場合は、当然のことながら、その漢字の持つ意味とそれによって表された〈和語〉の意味が一致するとは限らない。そこから、表意文字である漢字によって表記された言葉の意味にさまざまな混乱が生じる。それは、日本古語の実体が見失われることにもつながる。

日本語「モノ」は漢字では三様に表記され、その意味の違いを反映しているが、そのような意味をなぜ mono という音の連なりでいうかについては物、者、鬼という漢字の訓釈をいくら深めても分からない。ジャン＝ピエール・ルヴェ教授<sup>1</sup>は、トカラ語の代名詞研究を通じ、一般的に指示的意味をもつ小辞(代名小辞)群 kV, sV, tV, nV, mV, wV (Vは母音)などのうち、日本語のモノは mV と nV が合わさったものであり、その意味は、「触知できるモノ palpable」と「触知できないモノ impalpable」であること、また同じく語源の定かでないコト(事)という和語も、この指示代名詞の語根 kV, tV が連なったものではないかという説を立てた。

ここで私は彼の説を検証しようとしているのではない。われわれモノ好きは日本語の起源を外に探ろうと、英仏独語といった現代印欧語まで対比の対象にしてみた時代があった。現在はそのような不毛な試みにあきて、印欧語と日本語との間に系統関係など求めようとはしなくなった一方、印欧祖語研究者がなんの先入観もなく、日本語「モノ」の起源は印欧語をさかのぼったところに求められるかもしれないことに思い至っている。実際、最近のヒトの遺伝子研究によれば、印欧語祖語の原郷が、ヨーロッパよりは日本の方に近い東北アジアのどこかであってもおかしくないというのだ<sup>3</sup>。

### 地名と当て字

<sup>2</sup>仏・リモージュ大学教授。印欧語学者。印欧語最東端のトカラ語の専門家。

<sup>3</sup>斎藤成也『DNA から見た日本人』(ちくま新書 2005年)。

日本語の漢字で表記されている語のなかにはモノ（物、者、鬼）のように意味から漢字に結ばれるもののほか、安豆麻（アヅマ＝東）のように漢字から音だけを借りた場合は、用いられた字の訓からでは意味不明、あるいは地名の孀恋のように、オトに会わせて用いられた漢字によって違った意味を含意するようになったものもある。

地名を書き表した漢字は当て字が多い。「春日」は、枕詞「春日ハルヒの」カスガ（奈良近辺）の連想による当て字である。カスガやアスカという地名の意味を、春・日や明・日・香、あるいは飛・鳥の字訓から推量しても無駄である。同様に、万葉仮名で書かれたものをその訓から理解しようとしても難しい場合がよくある。東（アヅマ）にかかる枕詞「鶏鳴」が「トリガナク」と読まれるのは、「等里我奈久」（18 - 4131）などという音だけを利用した書き方があるからだが、この枕詞の意味は音仮名として用いられた五つの漢字の意味にはまったく関係しない。

群馬県の赤城山から発して利根川に直接注ぐ「粕川」（カスカワ）という名の川がある。この川名は四百年以上前に、川に酒粕を流したことに由来しているそうだが、粕川はカス川という名であったから、人々は酒粕を流すことを考えたのであって、酒粕を流し始めたからカス川になったのではないと思われる。

滋賀県の岐阜県寄り、伊吹山の近くに加須川（カスカワ）という名の峠があったらしい。その岐阜県側には揖斐（イビ）川に注ぐ粕川がある。こうしたカス名がすべて「酒粕」だったとは考えられない。加瀬（カセ）川（熊本県）などにも共通する \*kas- 語根は漢字表記からは決して見えてこない。

#### 河川名の語尾

生活水に関係する河川は山岳よりも重要だった。ところで河川名は必ずしも「-川」で終わるわけではない。「-谷」、「-沢」、また、北海道・東北などのアイヌ語圏、旧アイヌ語圏の「-ベ（ツ）」「-ナイ」なども、川、沢または流域を表す。河川の名の重みは山岳名に及び、日本の山岳名には河川・沢・谷名をもつものが少なくない。新潟、長野県にまたがる群馬北部の、水の豊富な山岳地帯だけでも、谷川

岳、水沢山、阿能川岳、大津川山、小沢岳、柄沢山、白沢山、幽ノ沢山、水長沢山、赤沢山などがある。

アイヌ語は縄文時代の日本列島で用いられていた言語のなかで、おそらくもっとも重要なものである。アイヌ語起源の地名は中部日本から北日本にかけいまだに残存している。しかし漢字からの借音のみで表記されたアイヌ語地名の生命力は衰え、河川を表すアイヌ語語尾は急速にその原初的意義を失った。その結果、相内沢、生保（オボ）内川、ルテンベツ沢、門別川、宇樽部川、といった具合にアイヌ・和語両方の語尾がついたり、時には「シト・ナイ・沢・川」というように流水の場を表す語尾が三重についたりする。秋田県東端、岩手県県境にあるこの「シトナイ沢川」の語根は「シト」のみである<sup>4</sup>。

和訳されたアイヌ語地名も少なくない。秋田県小坂町の地名、砂子沢（スナゴザワ）はアイヌ語のピナイ（小石・沢）の和名か？山梨県の日川（川＝内）のヒもアイヌ語かもしれない。アイヌ語としては秋田県のヒナイ（比内）町に残る。稚内（ワッカナイ）の和名は水沢である

#### 「谷（ヤ、ヤツ、タニ）」について

「泉出でて川に通ずるを谷と為す」は、古語辞典『字訓』に『説文』からの引文として載っている「谷」の解釈である。「渋谷区鶯谷町」のアイヌ語風、谷（ヤ）と、西日本風、谷（ダニ）という二つの読みは「谷」という文字が日本で柔軟に受け入れられたことを示している。小坂町には大谷地（オオヤチ）という地名があり、ヤチは沼沢地を表す普通名詞とばかり思っていたところ、田村すず子『アイヌ語辞典』で、**yaci** が「湿った泥」であることを知り驚いた。私の感覚ではヤチは盆地にあっても肝腎の部分は平坦であり、溪谷を思わせるタニとは違ったものだ。『字訓』には「わが国には東北方面に〈やち〉、〈やつ〉の語があり、初期の稲作時代に、その谷水が自

<sup>4</sup> [シトとはアイヌ語で、植物でんぷんでつくった餅、団子]のことだが、シトに河川名の語根を想定しようとする場合、むしろ **sir-tok** 「あたり・突き出ている（もの）、ひじ」（田村すず子『アイヌ語辞典』）から生じた **sittok** (シットク) が都合がよい]

然灌漑の源泉を為していたことから聖地とされた」とあるが、ヤチの水は濁りやすく飲料に適さないことがしばしばで、清冽で濁りのない「谷水」とは違うように私には思える。『字訓』にはこの語がもともとアイヌ語であったという注記はない。

江戸時代、方言集『物類称呼』を著した越谷吾山は、自分の名前にも用いられている「谷」について次のように述べている。「谷<sup>たに</sup>。関西にて たにと称す 黒谷<sup>くろたに</sup> 鹿谷<sup>しかたに</sup>のたくひ也 相州鎌倉及上総辺にて やつと呼 扇か谷亀か谷等なり 江戸近辺にて やと唱ふ 渋谷<sup>しぶや</sup> 瀬田谷<sup>せたがや</sup> 等也」(八坂書房)。秩父、千葉、横浜、白石(福島)には谷津(ヤツ)という名の川がある。

「谷(コク)」は漢字の音(オン)。地名で用いられている「谷」の訓は、アイヌ語のヤチ(ヤツ)とその変化したと思われるヤが関東以北に多く、西にはタニが多い。中国語起源ではない日本語タニ、ヤツ、ヤに、「谷」一字を用いたのは、それぞれ違った源から生まれたいくつかの語に共通するものを表記するためと思われる。

### 「谷」とその類語

ルヴェ教授は **tani** を **t-an-i** と三つに分節し、語根は **-an-** とみた。秋田県の地名、阿仁合(アニアイ)、阿仁(アニ)、陸中の小流、兄川(アニカワ)のアニはこうした分節から解明されるかもしれない。これらの地名は直接的起源としてはおそらくアイヌ語だろうが、**-an-**は印欧祖語では、**-on-**と並んで河川名に頻用される語根である。

利根川のトネの語源にはアイヌ語説があり、「長い」を表す **tanne**(新村出)とか、もっと直接的な **to-ne**(to 湖 + ne 断定辞)というものもある。トネ(地方)とタニ(川岳)が縄文時代の距離感覚では近所だとしたら、トネはアイヌ語の **tani**(こちら)と対をなす指示詞、**toni**(あちら)という可能性もある(**toni** + 強調辞 **a = tone**)。この場合は、谷川(岳)のタニもアイヌ語ということになる。

西日本のタニに対し、東・北日本ではサワ(沢)が用いられる。山岳地帯を流れる比較的小さな河川名の語尾としては〈川〉の他、〈谷〉、〈沢〉がある。ごくおおまかな調査だが、岐阜県の山地を流れる川の名は、カワ語尾と、タニ語尾が拮抗、サワ語尾は長野県境

を除いてほとんどない。一方、秋田県ではカワ語尾と拮抗するのはサワ語尾であり、タキ（滝）はあってもタニ語尾は私の簡単な調査では見つからなかった。群馬県を中心に新潟、長野、岐阜、富山にまたがる山岳地帯の小川名の語尾では、カワ語尾 2 に対し、タニ、サワ語尾がそれぞれ 1 という割合で、タニ、サワ語尾あわせてカワ語尾に対抗している。東西でのタニ／サワ相互排除の関係は、西で主に用いられるキケ（池）と東で用いられるヌマ（沼 nu-ma?）の対立に似て、日本語形成の複雑さを表すものだろう。

ルヴェ教授はカワを **k-aw-a**、サワを **s-aw-a** と分けた。この分節には当初、到底納得できなかったが、カワ、サワの古形が **kap(h)a**、**sap(h)a** であったことを考えると **\*k-ape**、**\*s-ape** は不可能ではない。**ape**（アイヌ語では **pe** 水）はグリーンバーグの想定する「水」を表す印欧祖語の四つの形（**ape**, **akwa**, **mor**, **wet**）の最初にあげられているものである。印欧語代名詞の基部 **k-**、**s-** は前述した通り、日本語の指示詞（カ、コ、サ、シ、ソ）の基部子音でもある。カワ（この水）とサワ（その水）だとしたら印欧語につながる<sup>5</sup>。

### 谷と滝 - 鼻音の問題

『説文』の「谷」の定義「泉出でて川に通ずるを谷と為す」によれば、谷は必ずしも傾斜の強い溪谷ではなく、東北地方のなだらかな低地・ヤチ（沼沢地）であってもよい。

ところで日本語にタキという語があり、これを「滝」で表す。滝の音読み「ロウ（ラウ）<sup>6</sup>」は白川静によれば「浅瀬のところを疾<sup>はや</sup>く流れる水の音を、擬声的にいう語と思われる。」

滝の字の音訓としては古来、訓のタキのみ。タキは本来「急流」のことである。『字訓』に「山川などの急流のところ、いわゆる滝川をいう。いまいう滝は古くは〈たるみ〉といい、瀑布のことで、急流をいう〈たき〉とは別である。〈たぎつ〉という動詞と関係があり、

<sup>5</sup> アブク abu-ku、秋田方言でのアブ abu は泡「アワ」の類語。現代中国語には pào「泡」がある。これらは awa の前段階として apa または apu を想定させる。

<sup>6</sup> サンスクリットの動詞語根 **sru**・流れる、に対応するギリシャ語レオー・流れるはロウに似ているが、このギリシャ語に擬音語源は考えられない。

〈たぎ〉と濁音で表記されていることもあるが、清音の方が原則のようである」とあるように、柔らかい表現ながら白川静はタキ = 清音を、「原則」として注記するのである。

岐阜県奥飛騨福地温泉の、冬に凍てついて青く見える滝は「青ダル」と呼ばれるが、このダルは樽ではなく古語の滝（タルミ）の残存だろう。また万葉集によく歌われている「吉野のタキ」はいわゆる滝ではなく、吉野川の「タギル」（泡立つ）急流のことであるから、意味は『字訓』の説明にかなっていない。キ、ギが清音であるか濁音であるかは滝の語源に大きな影響をもつ。タキが「タギル」と関係していることを認めながら、白川静はなぜ「清音の方が原則のようである」と述べたのだろうか？

万葉集に頻出する滝（万葉仮名では、多伎、瀧、太伎の三種）は正宗敦夫の『総索引』では清音ではなく、21例すべてタギと濁音で読まれているが、これが単なる濁音 **gi** なのか鼻濁音 **ngi** なのかは不明である。文字の清濁と音声的清濁は別問題という考えもあるようだ。このギは古代音韻では甲類のギと呼ばれるもので、説によっては二重母音から成ると考えられている乙類ギとは異なる。

ガ行とナ行の交通は古代の鼻音の問題である。橋本進吉は奈良朝時代ガ行鼻音(ガ、ギ、グ、ゲ、ゴ)は「当時はなかつたのではあるまいかと思われる」（『國語音韻の研究』岩波書店）と述べた。大野晋が上代日本語格助詞ガの音価を **ga** と想定し、タミル語の小辞 **aka, akam** につなげたのは、この鼻濁音史の定説に従ったからだろう。

「滝（タキ、タギ）」についての白川静の「清音原則」がこうした日本国語学の伝統に則ったものであるかどうかは分からない。橋本進吉の弟子である有坂秀世は上代の鼻音について師とは少し違った認識をもっていた。平安初期の円仁（慈覚大師）がその『在唐記』に、梵語の **ga**（喉音有声無気音）に「本郷我字音」、**na**（喉音有声鼻音）に「本郷鼻音之我字音呼之」と記したと有坂はある書評の中で述べている（『國語音韻史の研究』三省堂、末尾）。つまり円仁は、サンスクリットの **na** 音は日本語の「鼻音の我の音（すなわち **nga**）」であるといっているのである。平安初期の人である円仁が自然に「鼻音之我字音」という言い方をしていることは重要である。おそらく



奈良時代もこの状況は変わらなかった。有坂は師の橋本に遠慮したのか「第八世紀の音韻の状態がそれとひどく異なっていなかったであろうと考えられるが、これ以上細かくは未だ明らかにされてゐない」（『國語音韻史の研究』）と慎重に述べるにとどめた。

1929年オランダ・ライデンで万葉集注解の第一巻目を著した J.L. ピアソン<sup>7</sup>は、上代日本語助詞ガの転記によく用いられる漢字「我」の音価につき、有坂がしばしば言及した中国語音韻研究家カールグレンを引用している。カールグレンも nga という音価を与えていた。

死ヌ／シグ、動く／エノグ（東北語）に見られるようなナ行・ガ行の相通を前提に、格助詞ガは人称代名詞汝（ナ）に起源をもつと私は考えている（『日本語はどこから生まれたか』ベスト新書）。橋本進吉が上代ガ行音の鼻音の存在に否定的だった理由はわからない。

日本のナに相当するサンスクリットの na には喉音、口蓋音、反舌音、歯音の四種がある。そのなかの有声の喉音 na は限りなく nga 音に近いのである。漢字（仮名も）は日本語形成に非常に重要な意味をもったと思われる鼻音やアクセントを表現できないので、縄文時代の列島語の実態は文字の導入によってむしろ隠された観がある。私見では、滝（タギ）と谷（タニ）の語源は同じもの。もしタニがアイヌ語に関係するとしたら、「滝」もそれに連なる。

日本語とアイヌ語とは無関係、日本語の起源の一つにアイヌ語などあるはずがないという牢固とした考えが、ヤマトとアイヌが再接触し始めた近代日本にはあった。アイヌ語地名やその明らかな和語翻訳名に囲まれ、ヤチ（谷地）、マキリ（小刀）、イタコ（言葉の巫女）、シラ（アイヌ語 ピラ・崖、坂）といったアイヌ（起源）の語を用いながら、北東北の人々は自己のヤマト起源を疑わない。

中央日本語の高調アクセントと、全体的に低く、ある部分がすこし高くなるだけの東北語の低調アクセントとの違いはどこから生じたのかと私は思っていたが、田村すず子の『アイヌ語辞典』に次のような記述があった。「(アイヌ語の) アクセントは日本語と同じように高低アクセントである。(...) 日本語では、どこまでが高く、ど

<sup>7</sup> 親ナチとされた彼の注解完成は 60 年代まで延びた。

こからが低くなるかが重要なポイントであるが、アイヌ語では、どこまでが低く、どこから高くなるかがポイントである」。

語末が強調されるフランス語に似た東北語独特のアクセントは、こうしたアイヌ語から受け継いだものと私には感じられるが、文字表記された東北語からはその特徴はまったく見えてこない。

### 地名にひそむ原日本語

#### - 霧積、孀恋、渋川、吾妻とはなにか -

ルヴェ教授は、水を供給する泉や河川の名前の追究が印欧祖語の語根の探求に重要であると以前から主張している。こうした探求の重要性は印欧祖語に限ることではないが、たしかに固有名詞では人名より地名、地名のなかでも古い河川の名は列島縄文語の痕跡がもっともよく表れているように思える。青森県白神山地の追良瀬 (oirase)川と十和田の奥入瀬 (oirase)川、秋田県の阿仁 (ani)川と岩手県の兄 (ani)川、谷 (tani)川と利根 (tone)川の共通点に気付くためには、われわれは漢字表記の視覚的呪縛から自由になっていなくてはならない。

群馬県と長野県の境にある碓氷峠の東側には利根川支流の碓氷川が流れ、その北に、霧積 (キリヅミ) という碓氷川に注ぐ川がある。魚影の濃い霧積川は長野寄りの霧積山ではなく、鼻曲 (ハナマガリ) 山 (1654m)から流れ出る。キリヅミ (キリヅミ) という美しい語感をもつこの地名は長いあいだ私にとっては謎であった。

この霧積溪谷をぜひ見たくなり、今年三月末のある晴れた日、車で出かけた。「キリヅミ／ズミ」の意味については漢字の意味をあまり信用せず、音の方からある見当をつけていた。碓氷峠の旧道から離れると、溪谷の断面は建築で言う「切り妻 (妻は端ツマ)」を逆さにしたような間口で最初は広く、同じ形のまま次第に狭くなり、温泉までくねくねと 8 キロほど登る。この川は土砂崩れや鉄砲水が頻繁にあったそうだが、現在は途中にいくつか堤防 (そのうちの一つは「霧積ダム」) ができたので、いまはそういうことはなくなっ

い。

谷の曲がり具合は碓氷峠の小型版であり、切れ込みの深さは岐阜県根尾（ネオ）谷断層の近くの根尾川溪谷を思わせる。霧積溪谷の奥に、互いに一キロも離れている二軒の湯宿があり、その間にも川が深く食い込んでいる。溪谷のどん詰まりの方の宿の標高は千メートルを越え、後ろは山の樹木の壁だった。

霧積に最初に想定していたものは「切り妻」だったが、到着して感じたのは「切り詰（キリツメ）」。その後すぐに連想したものは、秋田県八幡平（ハチマンタイ）の北斜面、切留（キリトメ）平。八幡平も切留平も命名の主体はアイヌではなくヤマトである。山の端は「キリ」とよばれることがあり、山中襄太の『地名語源辞典』（校倉書房）によれば、この「キリ」を表すため、切、伐、桐、錐、霧、喜里、吉里などが用いられるとある。足尾山地と関東平野のキリにある桐生の桐もこの「端」を表すキリだろう。

上代特殊仮名遣いによれば、切、伐、断、桐、錐のキは甲キ、霧のキは乙キだが、群馬県はこの仮名遣いがもともと行われなかったアヅマであり、霧積という漢字の使用はおそらく中央でキの甲乙が消滅した平安時代以降だから、「霧」、「切」は、文字は違うが、音韻の違いではない。この溪谷は最高千メートルを越える高みにあり、外気と水温の差が激しくなる朝方は霧が多く出る（霧積）ことも想像されるが、命名の動機としては変化する自然現象より、地形を表す「切り端ツマ」や「切り留トメ」のほうがわかりやすい。

霧積溪谷からの帰りは、碓氷峠を越えて軽井沢を通り、浅間の麓から孀恋（ツマゴイ）に出た。孀恋という表記も昔の命名のいわれを隠しているものだろう。ツマは日本語では端ツマであるが、古来夫婦の片方をいった。古語辞典『字訓』はツマに、夫、妻、孀の三字をあて、「孀<sup>じゅ</sup>は需<sup>じゅ</sup>声。需はもと雨請いする巫女<sup>ふじよ</sup>を意味する字であった」と述べている。孀恋の恋の字は、明らかに女性としての孀ツマに引かれて生じている。「霧積<sup>キリツミ</sup> / 切端<sup>キリツマ</sup>」溪谷から登って来たばかりの私にはこれが明白な当て字に見えた<sup>8</sup>。

<sup>8</sup> [母音交替による機能の分化は日本語にも印欧語にも共通した特徴である。火（ヒ、

広大な嬭恋村は浅間山（2568m）のふもとにある。鬼押出しを越えたあたりで浅間山の北方にそびえる、浅間に劣らず雄大な山がいやでも目に入る。有料道路料金所の年配の人によれば、四阿（アヅマ）山（2354m）（通称アヅマヤサン。アガツマ山とも呼ばれる）。「あの四阿山の麓が嬭恋です。私は嬭恋出身ですから間違いありません」と彼は言った。

軽井沢方面からものを見ることに慣れたわれわれは、軽井沢より嬭恋の方が古い歴史ある集落であることを忘れていた。われわれにとって嬭恋は浅間山の裏という感覚だ。「北軽井沢」という、軽井沢を表に出した言い方もある。しかし軽井沢が明治中頃から避暑地として開発される前はそうではなかった。嬭恋の方から見るとしりとやさしそうな四阿山に対し、飲料水もろくにもたらさないどころか、ときどき噴火して群馬側に大きな被害をもたらす新しい浅間山は恐ろしい山だったのだ。硬軟両山の裾野が交わる高原、すなわち「端交（ツマカイ）」に「ツマゴイ」はある。

嬭恋村から吾妻（アガツマ）溪谷の方に下る。ここを流れる吾妻（アガツマ）川を「死の川」と呼ぶ人がいたので、そのわけを知りたいと思い、長野原の近くで河原におりてみた。本流は白濁した茶色で、虫のたぐいはいるだろうが、魚がいる気配はまったく感じられない。ところどころ渋錆色の細流が山の岸から川にしみ出している。この上流には須川が吾妻の本流に注いでいる。

須川は強度の酸性河川で、以前は酸川（スカワ）と呼ばれていたらしい。そういえば、秋田、岩手、宮城の県境にある栗駒山頂近くの須川温泉も強度の酸性温泉である。十和田湖には酸<sup>+</sup>カ湯という、これも強い酸性温泉がある。酸川は字面が陰惨なので代わりに須川に改めたものだろう。吾妻川の上流には須川ほか、万座川や、四万（シマ）川といった癖のある温泉からの河川が流入し、錆を含む赤

---

ホ)、木(キ、コ)。「手」に関する、タなごころ、テ(手)、トる(取る)。目に関する、マなこ、ミる、メ(目)、モる(守る)。動詞四段・カ変活用の未然 -ア/-オ、連用 -イ、終始 -ウ、已然 -エ(乙)、命令 -エ(甲) など]

水も流れ込んでいる。ろくな魚は棲めそうもないが、「吾妻川釣行」という表現があるのは、比較的流れのきれいな場所で魚の放流を行っているからだろう。河口（渋川で利根川と合流する）付近でも、吾妻川の川面は少しも芳しくないが、もう前橋に入ると鮎が釣れる。利根川の再生力は抜群である。利根（トネ）が母の枕詞「垂乳根の」の乳根（チネ）に関係づけられたのも理由のないことではない。

渋川市に渋川という名の川は現在見あたらない。渋川市役所の企画開発課の方から送られた渋川の地名起源説のうちには、川（吾妻川）の錆色（温泉、鉄滓など）に関係させたものが半分ある。渋（シブ）川は錆（サビ）川のことだったのだ。それでは吾妻（アガツマ）川とはなんだったのか？

大昔の古吾妻川時代、吾妻川の流域は今とは全く逆に、孀恋を通過して長野県の上田・小諸の方へ流れていたという。現在の浅間山の形成前である。「吾妻」と「四阿」は字面では何のつながりもないが、アガツマ、アヅマの間には明らかな共通点がある。ここで日本ではしばしば河川名が山岳名の元になっていたことを思い起こしてみよう。アガツマはアヅマ（ヤ）山の南端を上田・小諸の方に流れていた。アガツマという名は、新浅間出現による瀬替え前のこの地方の太古の表情を表していたに違いない。このような時代から孀恋にはヒトが暮らしていたのだ。吾妻の妻（ツマ）は、霧積の積（ツミ）、孀恋の孀（ツマ）同様、（山の）端<sup>ツマ</sup>だろう。アガは、阿賀野川（福島県内では阿賀川）のアガと同じだとして、もしアガの意味がアイヌ語の **wakka**（水）（印欧語 **akwa?**）に関係するとしたら、アガ・ツマはアイヌ語・和語で「水の端<sup>ツマ</sup>」という美しい縄文のイメージになる。

こうした分節が可能であり、縄文時代は単音単位の分節がふつうだとした場合、次にツマの **-ma** と、**ya-ma**（山）、**nu-ma**（沼）、**shi-ma**（四万）、**asa-ma**（浅間）などの **-ma** の意味、さらに語根部分のツ、ヤ、ヌ、シ、アサなどがどのような意味だったかが問題になる。しかしこれについては稿を改めなくてはならない。

日本列島の諸言語を漢字で表すことで、列島は漢語文化という強

力な価値観に染め上げられたとあってよい。漢字という方法論は列島諸語に強い力と、その世界を外に結ぶ可能性を与えたが、失われた価値観、古い感受性も少なくない。縄文時代の列島言語がどんなものであったかを探るためには、日本語をむやみに外の言語と比べるのではなく、音と意味の後天的枠組みという漢字の性格をよくふまえた上で、列島語の内的再構成をできるだけ古い時代までさかのぼらせてみる必要がある。